乱と同

松浦敬親

第七号のこの欄で述べたように、『広辞苑』で「滑稽」を引くと、「滑」は乱、「稽」は同の意で、知力に富み弁舌さわやかな人が、巧みに是非を混同して説くこと、とある。しかも、「稽」は酒の器の名で、酒が器から流れ出るように、弁舌のとどこおりないこともいう、とある。
つまり、知力で混乱させ、その是非の混同に酔わせれは、滑稽なのだ。

① 柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺　　子規

② 柿食うて居れば鐘鳴る法隆寺　　碧梧桐

第九号のこの欄で飯塚ひろし氏が引用した句だ。

①の上五中七にはかつて日本の何処にでもあった古里の秋を感じる。
そこへ法隆寺をぶつければ、日本を代表する古里の秋になる。
従って、偶然の鐘が必然に響くし、その混同に酔うことが出来る。

一方、②になると事実報告的で、是非の混同がない。従って偶然の方に眼が行き、必然にまでは深まらない。
勿論、①を前提にすれば笑えるが①ほどには酔えない。
写生句として正確でも、文学的な強さがないからだ。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

③ 薬食ふ胃の腑へ鐘や興福寺　　敬親

　有名な阿修羅像のある興福寺だ。
『広辞苑』で「阿修羅」を引くと、仏教では天竜八部衆の一として仏法の守護神とされる一方、六道の一として人間以下の存在とされる。絶えず闘争を好み、地下や海底にすむという。」とある。そんな阿修羅が合掌に到るのが、あの像だ。
季語「薬食ひ」で寒中の　滋養のために獣肉を食べること。合掌しないと悪酔いする。

④ おちんちん欲しと裸の女の児　　古城

第九号の句から。女児の本質の一端を突いている。
<天照らすほとやはらかき伊勢あはび>(豊親)は、クラブ「天の岩屋戸」の高級酒。
身体や糞尿などを扱うと子供達が喜ぶべし、俳諧の出発点とも重なって活気が出る。

⑤　西洋と名づけタンポポ帰化させず　　健

　西洋タンポポは既に帰化し、ビールのように日本人に馴染んでいる。
しかし、区別のつく人は、よくこの種の行動に出る。祖先は同じなのにね。
俳句と俳諧(滑稽)も同様。

⑥　政治屋は人騙すとき白いシャツ　　遊亀男

政治家もどきが政治屋で、利権を仲介する。ラベルは立派だが飲めば悪酔い。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

⑦　幾人か落したき人蟻地獄　　吉憲

政治屋や選者もその対象だが、なかなか落ちない。句材になるからまあいいか。
他に<ちゆんと立ちちゆんころりんと雀の子>(真一)も面白く読んだ。
そして、<にやんと立ちにやんころりんと子猫かな>と応用して楽しんだ。

⑧　白魚の点と線解く胃袋署　敬親

これは<ピンと立つ白魚刺身点と線>(京子)の応用③と同じくまた胃袋の句になったが
腑に落ちるかどうか・・・。
最後に滑稽の「乱と同」(変容と統合)が①の文学的な強さになっていることを
もう一度指摘しておく。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。